子どもと出会うということ

教育学部　吉田章宏

Ⅰ はじめに：私の世界

私の研究の主題は、「授業を生きる人間の現象学的心理学」というものです。

授業というのは、皆様がご存じのように、「学校の教室で先生が生徒に教える」と一般に理解されている、あの過程、活動、経験、体験、出来事のことです。授業のなかでは、人間たちが生きています。人間たちが授業を生きます。授業は人間たちによって生きられています。授業を生きる人間たちとは、授業者［業（ギョウ）と業（ゴウ）を授ける者］である先生と、受業者である生徒たち（子どもたち）、です。研究者や参観者のような第三者も、「授業を生きる人間」の中に含めてよいでしょう。ここで、ただの「心理学」ではなくて、わざわざ「現象学的心理学」としている理由にも、少し触れておかなければなりません。日本の大学で「心理学」といえば、普通は、「現象学的心理学」のことではありません。「現象学的心理学」は「心理学」の中では少数派であり、いわば「異端」なのです。どこが異端なのでしょうか。普通の、多数派で正統派の心理学は、哲学的には、科学主義、実証主義の立場に立ち、物理学と生理学などの自然科学研究の流れを汲み、その延長上にあります。これに対して、少数派・異端派に属する現象学的心理学は、哲学的には自覚的に（フッサールを始祖とする）現象学の立場に立ち、詩や小説などの文学や美術など、もろもろの芸術に親近性をもっているのです。「対象は、われわれに語るべき何かをもっている・・・。詩人や画家は、生まれながらの現象学者なのだ、といってもよい。あるいはむしろ、われわれはすべて生まれながらの現象学者なのだ。」（ベルク、V.d.著『人間ひとりひとり』103ページ）。学問の世界での、現象学的心理学の仲間には、現象学的精神病理学、現象学的社会学などがあります。しかし、その仲間たちも、現在の段階ではまだ、各学問分野で、少数派で異端の立場に置かれているのです。

さて、私個人は、心理学の学び始めには、正統派の心理学の中で育ちました。縁あって、日本の生きた教育実践の研究（教育実践者として著名な斎藤喜博先生の「教授学研究の会」）に加わるようになり、そのことを契機として、次第に、正統派の心理学から離れ、異端である（オランダのユトレヒト学派、米国デュケイン大学などの流れを汲む）現象学的心理学に入って行ったのです。正統の多数

派から異端の少数派へと生まれ変わったという経験を、私はしているわけです。

「授業研究」には、典型的には、教師と子どもたち、そして、それを研究する研究者たちが関わります。教師や研究者のような大人たちばかりでなく、子どもたちが、研究の主題になります。現象学的心理学の立場からは、教師の生きられた世界、研究者の生きられた世界ばかりでなく、子どもたちの生きられた世界とその変化が、中心的な主題となるのです。授業とは、大人である教師の世界と子どもたちの世界との「出会い」により、それぞれの世界が変化する出来事です。そこで、本日は、私がこれまで授業研究のなかで考えてきた、「子どもと出会う」ということに主題を絞って、お話をしたいと思います。ところで、現象学とは何か、現象学的心理学とは何か、と問われるかもしれません。これは大きな問題で、真っ正面からそれらを論じたら、今日の話は、主題からすっかり逸れてしまうことになるでしょう。それは何とか避けたい、と思います。ただ、現象学的心理学の立場から、心理学的研究の方法論と科学の本質について、次のような簡潔な文章があるので、ご紹介し、少しご説明しておきたい、と思います。

「心理学的研究の方法論について考えていくとき、もっとも重要な事実は、研究者である私達も、研究される人々と同様に、世界＝内＝存在［人間（吉田注）］なのだ、ということである。私達は経験する者なのであり、意味を与え、意味を受け取っているのだ。他者の経験の中で私達が研究しているもろもろの過程と構造とは、研究そのもののもろもろの過程と構造と、本質的には同じなのである。私達は何事かを理解しようとする。これは私達がその意味を自分達自身にあきらかにしようとしているということだ。その何事かを理解すると、私達は今度は、その理解したことを他者に伝えようとする。これがもっとも広い意味での科学の本質である。」（キーン、E.著『現象学的心理学』1989年、52ページ）　研究する私達と私達によって研究される人々は、ともに等しく人間であり、したがって、研究される人々の心理過程と、研究する私達の心理過程とは、その構造と意味において、本質的には同じなのです。このことが、研究のそもそもの前提・原則となる、というのです。本日ここでの「何事」かは、「『子どもと出会う』ということ」です。私は、これまで、その何事かの意味を自らに明らかにしてきました。そこで、本日のこの機会を活かして、私が理解したことを、皆様にお伝えし、ついで、皆様からも、皆様が理解なさったことを、私にお伝えいただきたいと思い

ます。互いの理解を言葉で伝え合い、私たちの理解を深めて行く、そういう「科学」と「学問」の営みを、この場で皆様とご一緒に為したい、と願います。

「学問する」とは、「問いを学ぶ」ことと「学ぶを問う」ことです。

II 「子どもと出会う」ということ

「子ども」とは何でしょうか。子どもには、「子供」と「小供」とがあります。

「子供」 石垣りん(1920~)「子供。／お前はいまちいさいのではない。／私から遠い距離にある／ということなのだ。／／目に近いお前の存在、／けれど何というはるかな姿だろう。／／視野というものを／もつと違つた形で信じることが出来たならば／ちいさくうつるお前の姿から／私たちはもつとたくさんなことを／読みとるに違いない。／／頭は骨のために堅いのではなく／何か別のことでカチカチになつてしまつた。／／子供。／お前と私の間に／どんな淵があるか、／どんな火が燃え上がろうとしているか、／もし目に見ることができたら。／／私たちは今／あまい顔をして／オイデオイデなどするひまに／も少しましなことを／お前たちのためにしているに違いない。／／差しのべた私の手が／長く長くどこまでも延びて／抱きかかえるこのかなしみの重たさ。」

私は、長い時間かかって、子どもとは「いま子どもである人、その人の子ども時代を、いま生きている人」である、と理解するようになりました。私たちは皆、かつては、子どもだったのです。それぞれの子ども時代を生きたことがあるのです。大人とは、今は、子どもではなくなった人々です。 そしてまた、「出会う」とは、出会う人々が、それぞれの生きている世界から「出て」、互いに「会い」、互いにその「同一と差異」に驚くことだ、と理解するようになりました。

「遠景」木山捷平(1904~1968) 「草原の上に腰を下して／幼い少女が／髪の毛を風になびかせながら／むしんに絵を描いてゐた。／私はそつと近よつて／のぞいて見たが／やたらに青いものをぬりつけてゐるばかりで／何をかいてゐるのか皆目わからなかった。／そこで私はたづねて見た。／――どこを描いていゐるの？／少女はにつこりと微笑して答へてくれた。――ずつと向うの山と空よ。／だ

がやつぱり／私にはとてもわからない／ただやたらに青いばかりの絵であつた。」

「幼い少女」は、大人の「私」とは、遠い異なった世界に生きていたのです。

ここで、時間に心を配りながら、心理学の在り方の可能性について、かい摘まんでお話してみたいと思います。さまざまな心理学の、人称性、主題は行動／経験か、人間／ヒトか、研究者・対象者は同質／異質、現実／虚構、数量／言語、日常／非日常、願いは制御・説明・理解・解放か、誰の為、強者／弱者か、仲間は自然科学／人間科学か、科学・学問とは、・・・など。

ここで一息ついて、以下、拙著『子どもと出会う』(岩波書店)から挿話の幾つかをご紹介し、「微塵の中に一切を見る」(華厳経)の精神で、考えて行きましょう。

III 「子どもと出会う」の自明性：「凡の世界」

日常的な「凡の世界」には、たくさんの自明性と並んで、子どもの生死と大人である私達の生死についての自明性が隠されています。長い人類の歴史を思う時、目の前の子どもと私とが出会うことは、奇跡とさえ考えることもできます。

問いは学問の生命です。そこで、問い。「子どもと出会う」ことは、「子ども」の生にとって、「あなた」と「わたし」の生にとって、どのような意味をもつのか。　子どもを「わかる」ことは、私の生にとって、どのような意味をもつのか。

IV　幸せな「子どもと出会う」：「明の世界」

「明の世界」で、「冷たい朝風呂」の話（正村公宏著『ダウン症の子をもって』新潮社、1983年、64~65ページ）を考えでみましょう。

大人である私たちは、時に、「子どもと出会う」を生きることができます。互いの世界が出会い、互いに驚き、喜びあい、そして、それぞれに変わる、そして、互いの世界が豊かになる、そういう幸せな経験をすることも、できるのです。

暗い心を抱いて苦しんでいた頃、赤ちゃんの目と笑いに、「人間としての救いを感じた」という小児科のお医者さんの話（小林登著『子どもは未来である』岩波書店、1993年、331ページ）についても、考えてみましょう。

しかし、「子どもと出会う」は、そのように、幸せな「出会い」ばかりではありません。不幸な「出会い」もあります。「数」に自然数ばかりでなく、「正の

数」と「負の数」があって、「負の数」もまた「数」であるのと、同じ趣です。

Ⅴ　不幸せな「子どもと出会う」：「暗の世界」

「暗の世界」で、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』の「反抗」の章から、「犬たちに引き裂かれる少年」の話を取り上げて、考えてみましょう。

「子どもと出会う」の陽画としての「明の世界」に対して、その陰画としての「暗の世界」の残酷悲惨な出来事が、今日の日本の社会にも、満ち溢れています。児童虐待、児童搾取、児童誘拐、少女売春、落ちこぼし、いじめ、・・・。

「反抗」での挿話は、その典型的形象と考えることもできるでしょう。

そこには、共に生きる人間として子どもを見る心と目が、欠落しているのです。他の人間を、自らの欲望充足のための道具、快楽のための道具、利潤獲得のための道具などとして見る、「道具」として見る、そういう心のみが陰に陽に働いているのです。それが、暗の世界の本質だ、と考えられます。

Ⅵ　「子どもと出会う」：「覚の世界」

島秋人『遺愛集』（東京美術、1966年）の「絵はへただけど構図がよい」という運命の言葉の意味の重さを考えてみましょう。

「みちーー紘子に」三井ふたばこ（1919~）　「あなたの髪を梳きつゝ／思うこと／／わたしが死んでしまっても／なお　のびつゞけるであろう／この愛しい髪／／なおふりつゞけるであろう／今日のような細い春雨／／なお　つゞくであろう／運命のうねった小径／／この一瞬　わたしの櫛は／不気味な戦慄とともに／みしらぬ未来の国をかすめる／／あなたの髪を梳きつつ／思うこと」

一瞬の「出会い」。子どもは生きて行きます、私が死んでしまった後も。

私たちは、凡、明、暗の世界を統合する「覚の世界」を生きることができます。「子どもと出会う」の凡と明と暗を知覚し、覚知し、統覚し、自覚し、覚悟して、生きる世界です。

「神様、私にお与え下さい。変えられないものを受け入れる平安を、変えられるものを変える勇気を、そして、この二つを見分ける賢さを。」(「平安の祈り」)

VII おわりに：あなたと私とが「出会う」

そして、私達は日常世界の「凡の世界」に、ご一緒に帰還します。子どもたちは、無言のうちに、大人たちが「覚の世界」に生きることを、望んでいます。

「子どもと出会う」その時々に、善き言葉と善き行為を、いまここで、「いま子どもである人、その人の子ども時代を、いま生きている人」に幸せをもたらす言行を、子どもたちに贈ることができる人間になりたいと、私は願います。また、そうすることで、私自身も、より豊かな世界を生きる人間になることを、願います。そして、すべての人々が、そのような「覚の世界」に生きる人間となることを望み、そのように成りそして在ることを可能にする、そのような人間解放のための学問研究を深めたい、と私は願います。子どもと大人たち、人間たちを、多くの苦難と悲惨から解放する学問の研究、人々に幸せをもたらす学問の研究、そうした学問研究の一翼を担うこと、それが「授業を生きる人間の現象学的心理学」の願いです。そのような学問研究の実現、それが、私の心からの願いなのです。

今日、いま、ここで、ある不思議なご縁によって、こうして出会っている私たち、あなた　と　わたくし。　「子どもと出会う」について語り合い、「あなた」と「わたし」が、これまで、どのように「子どもと出会う」を生きて来たかを共にかえりみて、互いに、理解を深め合いましょう。その理解の深化と豊饒化、そして、そうした理解の共有が、現象学的心理学の学問研究の営みの原型なのです。

子ども一人ひとりが、そして、大人である私達一人ひとりが、これまで生きて来た道、これから生きて行く道を、遠くに望み、近くに見て・・・。

参考文献　『日本の詩歌２７：現代詩集』、中央公論社
キーン、E.吉田章宏・宮崎清孝訳『現象学的心理学』東京大学出版会、1989年
ベルク、V.d.早坂泰次郎・田中一彦訳『人間ひとりひとり』現代社、1976年
吉田章宏著『子どもと出会う』岩波書店、１９９６年

自己紹介　吉田章宏（よしだ　あきひろ）：１９３４（昭和９）年、東京・神田の生まれ。東京大学教育学部教育心理学科卒。米国イリノイ州立大学大学院卒、Ph.D.。米国コーネル大学、お茶の水女子大学、東京大学を経て、１９９５（平成７）年、岩手大学教育学部教授に着任。東京大学名誉教授。教育心理学専攻。研究テーマは「授業を生きる人間の現象学的心理学」。
著書『教育の心理』（日本放送出版協会）、『子どもと出会う』（岩波書店）。